



# 小池辰雄記念図書室だより

2016. 8. 10(水) NO.32

千葉県若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

「無者キリストを読み終わって」  
伊藤泰輔 (余市)

「本書は万人むきに書いたつもりである」(P3 総序)、と小池辰雄先生はお書きになっています。仏教用語もあり、東洋の香りが漂う文章は、とてもエネルギーでリズム感もよく、読んでいて楽しく感じました。小池先生が多くの人に主イエスキリストを紹介したい熱意がよく伝わってきました。

私が余市恵泉塾に来させていただいてから2年、つまり札幌キリスト召団の福音を学び始めてちょうど2年経って、『無者キリスト』を読み始めたこととなります。そのためか、内容に違和感はありませんでした。また、水谷師の先生が小池辰雄先生だということも読み始めてすぐ納得しました。教育界、日本のキリスト教界の改革を強く訴えていらっしゃるからです。とても共感できる内容でした。

私が生活、仕事における実践現場で、愛せない者から愛する者への造り替えが必要である、とひしひしと感じ、苦しんでいる時でした。ちょうどその頃、キリストが無者であり、その具体的言動についてわかりやすく書かれている本書に出会えたことは、タイムリーな助けとなりました。

余市恵泉塾での生活は、小池先生の言葉をお借りすれば、聖霊の世界への「突破、突入」を目指すのでなければ意味を成さず、また、まさに恵泉塾こそが、「突破、突入」の実践現場であると実感しています。この本は、私が余市で信仰生活を送る上で必要不可欠な本であるからこそ、主なる神が与えてくださったのだと思います。

今年5月、ニューズレター「波止場便り」第270号が発行されました。水谷先生が小池先生と取り交わされた書簡のことが記されていました。そこには「聖秘」とされた内容が公開され

ています。小池先生は水谷先生のことを「貴君は、ある意味で私の魂の世界の後継ぎである」として喜びを表されました。そのお気持ちを汲んで、魂の世界の後継ぎでいらっしゃる水谷先生は、本書をわかりやすく解説してくださり、その解説の中で、小池先生についてたくさんお語りくださいました。ここに私たちは強い師弟愛を感じます。

水谷先生は、ニューズレターの中で「私は小池神学を逸脱したのではない。愛の実践を通して先生の到達点を一面乗り越えたのだ。先生は、そのことを誰よりも喜んでおられると思う」とお語りになりました。『無者キリスト』を読み終えて、小池辰雄先生が今もどこかに生きていらっしゃるような、そんな気がしています。

## 小池辰雄を読む会

### ●余市「無の神学」

2016年9月4日(日) 13:30~15:00  
余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家  
\*会費:無料(自由献金)  
\*連絡先:0135-23-9222(木下)

### ●札幌「無者キリスト」

2016年10月1日(土) 13:30~15:00  
札幌市南区川沿 10条 3-10-5 札幌祈りの家  
\*会費:無料(自由献金)  
\*連絡先:011-571-2348(浅井)

### ●都賀「聖書の人ルター」

2016年8月20日(土) 10:00~12:00  
2016年9月17日(土) 10:00~12:00  
千葉県若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階  
\*会費:1000円

\*連絡先:043-235-3815(石丸)

\*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

\*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています  
図書室便りは隔月発行です

## 知りたくなかった真実

今年 73 歳になる弟から電話があって、「親父がヒトラー礼賛者だったなんてことはないよな」と唐突に訊いてきた。弟の娘が、「おじいちゃんがヒトラー礼賛者だったってネットに書いてあるけど本当？」と聞いたのだそうだ。

ネットのどこにそんなことが書いてあるのかわからないが、「ヒトラーは悪魔」という今の常識から考えると、弟の娘のショックも仕方がないだろうが、「何だ知らなかったのか」と答えると弟も「えー!？」と驚いているのには、逆に驚いた。

弟を除いて私も姉たちも、父・辰雄が「ヒトラーは天才だ」と話すのを何度も聞いている。弟だけは終戦の年 2 歳だから知らなくて当然だが、このこと自体は特別驚くほどのことではない。戦後 70 年もたつと、当時の日本人の一人残らずが「ヒトラー礼賛者」だったことなど誰も覚えていないだけのことだ。

ただ辰雄がそうした一般的な日本人より多少熱心にヒトラーを賛えたのは、辰雄がドイツ文学者であったからヒトラー礼賛以前に熱烈なドイツ礼賛者だったし、当時辰雄と同世代のドイツ文学者は、例外なくナチス・ドイツ礼賛者だったと思う。私は 5 歳の時、父がスクラップ・ブックに貼ったヒトラー・ユーゲント（ヒトラー青少年団）の写真を見せ、「ドイツの少年たちはすばらしい」とほめたのをよく覚えている。午前の日差しがまぶしい四畳半の書斎につながる窓辺でのシーンを今でも鮮やかに思い出せるのは、その写真に写っていたドイツの少年たちの服装、真っ白なセーターとストッキング、それにがっちりした編み上げ革靴をうらやましく、ほしいと思ったからである。日本の週刊誌などまったく関心を持たなかった辰雄だが、ドイツの写真雑誌は特別に取り寄せていたので、宣伝上手のヒトラーにコロッと騙されてしまったのだろう。

戦争が終わってしばらくのあいだ、わが家は全員が四畳半に寝ていた。夜中にうなされた父がドイツ語で怒鳴っているのを何度も聞いたことがある。あの時辰雄は夢の中でドイツ人相手に「ヒトラーの失敗は、ナポレオンの歴史に学ばずソ連侵攻をしたことだ」などと議論をしていたのかも知れない。まさかヒトラーが六百万人のユダヤ人を虐殺したことなど知る由もなかったのである。

ドイツ大好き人間の父が揺らぐようになったのは、私の姉が夢中になって読んだベストセラー『光

ほのかに・アンネの日記』(文藝春秋社)を家庭で話題にした昭和 27 年頃からだったろう。ナチスのユダヤ人強制収容所の惨劇を私も知ったのである。

昭和 27 年という年は、熊本阿蘇山での霊的体験から 2 年目、「武蔵野幕屋」を立ち上げ、『曠野の愛』誌を刊行しはじめたばかりで、もはやヒトラーもドイツも辰雄の関心のはるか外になっていた。しかしそれから数年後のある夜、高校 1 年生になっていた私をわざわざ書斎に呼んで、『読んでごらん』とだけ言って渡されたのが『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』(みすず書房)であった。ヒトラーが悪魔であったことを知った辰雄の衝撃は、かわいそうなくらいだったと思う。本を渡しながらただ首をふるだけだった。

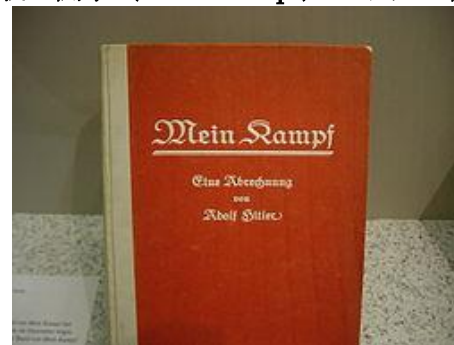
その翌年、『三光 日本人の中国における戦争犯罪の告白』(カッパ・ブックス)という本が出てベストセラーになった。こうしたベストセラーものを嫌っていた辰雄は、珍しくこの本を買ってきた。日本軍が中国大陸でおこなった殺戮の写真を載せたものだったが、辰雄はこれを茶の間に放り投げたままこの本については一言も語らなかった。

小池辰雄が「ヒトラーの礼賛者」だったと言っても家庭内の出来事だし、社会的にそういう発言をしたわけでもないのだから、「たいしたことじゃないよ」と弟には話したが、本当に本人にとって大したことじゃなかったとは思えない。

私の印象からいえば、この戦後の一連の出来事の中で、この世の人間の所業一切を(自分をも含めて)「愚かなことだ」と深く心に刻み、この世＝此岸ではない「彼岸」に生きたいと願ったように思う。

前号に書かれた辰雄の号「天鐘」の前には、「彼岸」という号を使っていたのもそういう思いからだろうし、やがて日本の高僧へ近づいていくのも、こうした契機があったからだと思う。

### 我が闘争 (Mein Kampf) ヒトラー著



1925 年発行初版 (ドイツ歴史博物館蔵)